アーカイブ室新聞番外編 16 号　（2011 年 6 月 14 日）

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊　珍しい、ヘビがいた。

国立天文台は、理学部天文学教育研究センターも含めて約 10 万坪の土地があり、こんもりとした森になっている自然豊かな所である。敷地内に官舎があった時代、官舎ゾーンに蛇がいることはあったが、やたら見られるものではなかった。最もひどい例は、官舎の庭の木にシジュウカラの巣をかけ、雛が巣立つのを楽しみにしていたある朝、巣箱の丸い穴から蛇が鎌首をのぞかせていたことであった。

また、台長官舎が外からの（外国人を含めて）研究者の宿舎になっていた頃、管理人として住んでいた事務の人は蛇を食べることを楽しみにしていたと聞いたこともある。かつては天文台構内で蛇はそれほど珍しい存在ではなかったのだが、最近ではほとんど見たことはなかった。見学者に向かって「蜂に注意」という張り紙はあるが「蛇に注意」というのはない。6 月 13 日、本当に久しぶり、何年かぶりに蛇に出会った。場所はゴーチエ子午環南側の見学者通路の上であった。蛇の方も人間をそれほど恐ろしい存在だとは思っていないようで、逃げるそぶりも見せない。そこでゆっくり写真を取った（写真 1）。

写真 1　久しぶりに出会った蛇

この蛇、何という種類かにわかには分からなかった。日本本土にいる毒蛇は「マムシ」と「ヤマカガシ」くらいしか知らないが、この蛇はどちらでもなかったのでカメラを直近まで近づけ撮影した。それでも蛇は逃げるようすはなかった。蛇にとっても人間は非常に珍しい存在になっているのであろう。

この蛇は恐らく「シマヘビ」であろう。「アオダイショウ」よりは色が薄い。なかなかスマートな体型をしている。子供の頃は蛇を見つけると片っ端から棒きれでたたいて殺して川に流した記憶がある。畑で草取りをしている時「マムシ」をつかみかけたこともあるが、その時はさっと草刈り鎌で首をはねたことを覚えている。

天文台にはまだまだ自然が残っている。整備を進めた太陽塔望遠鏡の半地下の分光器室

に、昨日もタヌキの足跡（写真 2）が残っていたし、今日も分光室への外側扉にはカタツムリ（写真 3）が這っていた。

写真 2　タヌキの足跡

写真 3　かたつむり

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp